

おるごへる '98₂



読んでみませんか

☆男が語る家族・家庭

豊島区立男女平等推進センター編 ドメス出版

豊島区「エポック10」で開かれた「女と男のゼミナール」の連続講座を文章にまとめたもの。弁護士、会社員、プロデューサー、フリーターなど6人の男性講師陣が実に正直に自分を問う真摯な態度で、そして「男」一般につなぐ視点で離婚、性、介護、子育て、自分の働き方などを語る。



☆これからの時代は女性でわかる

佐藤綾子 リクルート出版

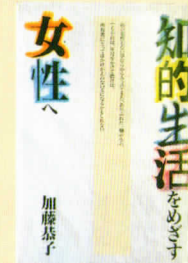
日本経済のバブル崩壊以降、ものの充足から心の豊かさを、人工物崇拜からナチュラル志向へ…と時代の変化を読み解く鍵が「女性」というキーワードではないかと著者はいう。ライフスタイルの変化における女性の役割と、新しい価値観に目覚めた女性たちの話をわかりやすくまとめている。



☆知的生活をめざす女性へ

加藤恭子 リクルート出版

“女性が勉強を続けていく”それはかつての女性にとってもそして現代の女性たちにとってはなおさら、生涯の課題となってきた。「勉強はもちろん生活の中でのそれ、独学を中心とした生涯学習を意味している」という。今何かを探している女性たちの参考になる本。



☆「家族」という名の孤独

斉藤学 講談社

精神科医の立場から、アルコール依存症、家庭内暴力、登校拒否、アダルトチルドレンなど様々な臨床ケースを通して家庭・家族の中に潜む病理を鋭く分析する。自分ではなんの問題もないと思っていても読み進むうちに、自分の中にも何かしら当てはまる病理性が浮かび上がってくる。



編集後記

新しい時代の風を感じることが、仕事にも役立つのではと何気なく参加した会でした。思いがけないこと。素敵な人たちとの出会い。講演会、読書、映画、振り返れば充実した1年が過ぎて、いつの間にかもう春。(彌)

自分にとってちょっと厳しいと思うことでもやってみる。目の前の懸案をひとつひとつ解決していく。この気持ちを支えるのは、もっと知りたいという好奇心。普段使わない部分の脳細胞を大いに刺激した一年でした。(千)

発行日 1998年2月
 編集 和光市女性問題行動計画推進委員
 浅川千代子・朝倉美彌子
 女性問題アドバイザー 笹倉尚子
 発行 和光市政策管理部政策室
 〒351-0192和光市広沢1番5号
 TEL(048)464-1111 内線2327

表紙
 「ハープハウスへようこそ」
 作：朝倉美彌子（和光市在住）
 一線美術会員、キルト作家

※この情報紙は再生紙を使用しています。



和光市から東上線で50分。埼玉県嵐山町の国立婦人教育会館が20周年を迎えました。

国際会議のできるホールや宿泊施設やテニスコート、お茶室、プールなど自然環境に恵まれていま

「研修、交流、情報、調査研究」を4本柱にした会館の利用者は、

これまでに延べ二百八万五千人になります。

「この会館に来た女性達が、自分のために勉強することで、非日常性を感じられる空間にしたい。これまで女性学を通じて、研究者を相互に結びつけてきました」と大野館長は言います。

女性学講座が16年間に渡って開かれてきましたが、昨年度からは、「女性学ジェンダーフォーラム」に発展し、ワークショップによる交流が行われています。また最近では、「教師のための男女平等教育セミナー」もスタートしました。

又エックは、20周年を契機に『エンパワーメントは21世紀への合言葉』というテーマを設定して、記念事業を実施中です。

「和光市のみなさんもぜひ、又エックの女性問題に関する講座や交流事業に、ぜひ参加して下さい。」

国立婦人教育会館 「又エック」 大野館長にインタビュー



1964年に文部省に勤務。その後、文部省婦人教育課長を経て現職。おのてるこさん 1964年に文部省に入省。77年から80年まで国立婦人教育会館勤務。その後、文部省婦人教育課長を経て現職。

泊りがけの研修も歓迎します」と大野館長。

又エックは女性に関する研修、交流、調査、及び情報収集の計画を持つている方は、団体、グループや個人でも男女を問わず利用できます。

手続きをする時は、電話や文書又は直接問い合わせてください。（利用目的、希望期日、人数、参加対象、研修内容など）

問い合わせは、国立婦人教育会館事業課

所在地 埼玉県比企郡嵐山町大字 菅谷728番地
電話 (0493) 62-6711
宿泊費 一人一泊 1,400円 (食事別途)

98〜99年度に策定を予定 女性「行動計画」 見直し中

一昨年度市民の皆さんに御協力いただいた意識調査の意見をもとに、現在「和光市行動計画」女性の地位向上をめざして一男女共同参画型社会和光プランの改訂を進めています。1992年に策定されたこの計画も、新たに最近の少子・高齢化、経済の成熟化、国際化、情報化に対応できるものにならなければなりません。

そこで、市ではこれら社会の変遷に対応できる行動計画を持つことを目標に、同計画の見直しを進めています。現在、皆さんからの意識調査をもとに検討が加えられ、男女が性にとらわれることなく自由に活動できる社会を実現するために計画を策定します。

友好都市訪問事業 女性の活躍するまちロングビュー 緑かがやく計画都市

昨年9月30日から7日間アメリカ合衆国の友好都市ロングビュー市に向けて、市民の海外派遣を実施しました。同市とは、もともとそれぞれの公立高校が姉妹校交流を始めたのがきっかけで友好交流が始まりました。和光市でもこれにより小中学校教員や中学生の派遣を実施して参りましたが、市民の要望により一昨年から市民訪問団の派遣も始めました。

この訪問団は、単なる観光旅行ではなく、現地でのホームビジット（家庭訪問）やホームステイを通して、そこに住む住民との交流を積極的に図り、それら異文化体験を通じて、参加者の国際理解につなげていこうという趣旨で行われています。



ラモナ・リーバー市長（左）と広報担当市職員

ロングビューの 市長は女性

1997年10月市民訪問団としてロングビューを訪れました。今年市政75周年を迎えるこの市は、美しい木立に囲まれた中に整然と街並みが作られています。街路樹の下でリスが椎の実を食べている横を人や車が行き交うような、自然と調和が取れている美しい計画都市です。

街の美しさと共に日本との違いを感じたのは、女性の活躍が目立つことです。人口約33,000

人のこの市の市長は女性。また商工会議所の事務局長、ほとんどの銀行マネージャー、図書館、老人ホームなど訪問した先々で出迎えてくれた責任者はことごとく女性でした。

アメリカでは1920年に女性に参政権が認められました。そして1940年代には、男性が戦争に行ってしまったために女性が働かなければならなくなつたのです。その結果、女性が男性と同じように働くことになったのです。そして、1970〜80年代にアメリカのほとんどの州で人権法が採択され、皆平等という認識のもとに雇用の際の資格、そのみが能力として問われるようになりました。

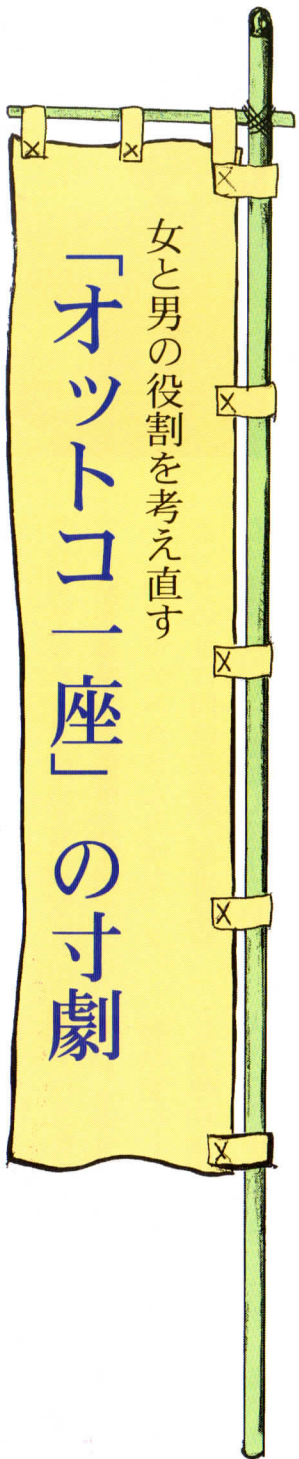
アフアーマティブ アクションの採用

また、多くの州がアフアーマティブアクションといって、ある集団が他の集団と比べ、著しく不平等な状態におかれている場合、格差の急速な是正のために取られる



積極的な優遇措置を立法化したのです。つまり二人の同じ資格を持った人が採用試験に来ていたら女性や黒人の方を採用するということです。これらの法律はかつて存在していた差別を是正しようとして成立したものです。ロングビュー市役所においては、職員250人中150人が女性です。

女性が男性と同等の能力があるということを認識することは至って自然であり、職場でも家庭でも能力に応じた責任ある仕事をするこの素晴らしさ、大切さを実感した三日間でした。



3月14日に中央公民館で公演

1977年に5人の
男性でスタート

全国に寸劇を出前公演する「オットコ一座」は「男の子育てを考える会」を母体としています。この会は1970年代に女性の地位向上を訴えるウーマンリブが盛ん



だった時期に産声をあげました。女性が自らの性と生の問い直しをしている中、こうした活動に参加している女性のパー

トナーである男性たちも自らの性を顧みることを迫られました。

1977年5人の男性でスタートしたこの会は、男が通常遠ざけている家事や育児を主体的に担うことで、作られた男のイメージを作り直そうという考えから始まりました。

男性のセクシュアリティをテーマに

以来20年間「労働と子育て」のシンポジウム、「男の子育て」新聞発行、「男の育児書」出版、保育園父母会などでの寸劇公演等、多彩な活動を行っています。最近ではアジアの買春春やいわゆる「従軍慰安婦」の問題など男のセクシ



です。男たちの多くは家庭や地域に目を向けていませんが、彼らは女と男の関係を問い直し、家事や育児・介護など個人的



インフォメーション
「オットコ一座」出前公演
日時 98年3月14日(土)
午後1時40分開演
場所 和光市中央公民館

出前公演が百ヶ所を越える

「オットコ一座」は様々な社会的な問題が出てくる中で、自分たちの問題意識としてとらえたものを、ただ講座などで語るだけでなく寸劇で表現することで、伝えたい側によりわかりやすく伝えることができるだろうと、自分たちが台本を作り80年から始めました。「男ならやめてみな!」新「男の道」のススメ”ビバ!私の愛すべき男たち”新・日本・男・風土

記”など10数本の演目を持ち、その内容は過労死、男の家事、育児、介護、セクシャルハラスメントなど多様です。寸劇はあく

までも見る側への問題提起にとどめ、敢えて結論は述べないというスタイルをとっています。現在までに女性センター、地方

自治体など100か所を越える出前公演をしています。98年3月和光市でも、”夢伝説・二人でつくる家庭”ようこそ私の結婚式へ”

という演目で公演しますので是非見て下さい。そしてあなたもパートナーと子育てや介護について考えるきっかけにして見ませんか。

この人にインタビュー 女性物理学者の仕事と家庭

和光市在住の物理学者、香取浩子さんは理化学研究所の연구원として、磁性の研究をしています。現在、双子の女の子の育児に奮闘中です。仕事と子育ての両立などについてお話を伺いました。

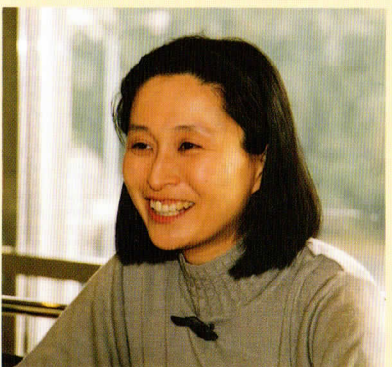
研究を始めた動機は、どのようなことですか?

私は小学生の頃から科学が好きでした。「かがく」という本がとても面白くて、大学で物理学を専攻しました。大学院に進学して、女性研究者である伊藤厚子教授に物理学の研究の楽しさと厳しさを教えていただきました。博士の学位を取得後、東京大学物性研究所に助手として5年間働きました。現在は、この理化学研究所で物

性の研究をしています。研究所には男性が多いのですが、女性として特別に扱われるということはありません。他の研究員の方と同様に、自分なりのスタイルを選んで好きな研究をすることが出来ます。現在の職場は活気がありとても満足しています。

現在の子育ては、何が大変ですか?

朝は大学で物理学を教えている夫が、子どもたちを保育園に送ってくれますが、迎えに行くのは私です。迎えに行く時間までには実験が終わるように工夫しています。やはり研究にはトラブルがつきものです。実験の途中で他の研究員の方に担当を変ってもらわな



▲かとりひろこさん お茶の水女子大学大学院卒業。東京大学物性研究所勤務を経て現職。学術博士

ければならないこともあり、そのようなときは心残りです。しかし、保育園に着くと二人が駆け寄ってきて、両手で抱くとても嬉しく幸せを感じます。一番困るのは子どもの病気です。夫と協力して子育てをしています。忙しいので大変ですが、仕事を辞めようとは思いません。

仕事をなぜ続けようと思ったのですか?

双子の妊娠を知ったときは、も

う研究を続けられないのではないかと思いましたが、幸い二人とも無事生まれ「中途半端な仕事はするな」という父のアドバイスもあって、産休だけで仕事に復帰しました。子供が生まれてから一年間は、母が八王子から我が家まで通ってきてくれました。両親の助けがあつてここまでこれたというのが実感です。

しかし、私のように両親の援助が受けられる人ばかりではありません。0歳児保育に関する市の援助をもっと充実していただけたらと思います。周りの人の励ましや好意に応え、後に続く女性たちのためにもやめずに頑張りたいと思っています。

これからの女性は、自分の仕事を大切に、これをしていきたいという目標を持って生きていくことが大切ではないでしょうか。

少子・高齢社会と核家族化の進展により、昔からの家族形態は変化してきています。そのような中で子供たちがすこやかに育ち、社会を支える親たちも安心して働ける社会の整備が今、行政の大きな課題となっています。

和光市では、「子育てに喜びや楽しみを持ち、安心して子どもを産み育てることができる社会」をめざして、「すこやかプラン」の策定を進めています。この計画は現在市民アンケートを経て策定の最終段階にあります。これが実行されることにより、市民の皆さんが安心して子育てをし、そして子どもたちも健やかに育つ社会の整備を実現していきたいと考えています。

育 児

投書をご紹介します

「育児／育児／わたし」私の生活を見つけた

出産を機に会社を辞めて育児を初めて1年。元来呑気な性格もあって、育児の大変さはやってみて気がついた。同じことの繰り返し、子供ペースの時間、こんなにがんばっているのに、誰も評価してくれないという何とも過酷な仕事の日々。なのに結構楽しめている自分分は思っていたより子供好きだった。

子育てを応援してくれる制度が欲しい

現在、6歳と10か月の二人の子を持つ働くママです。豊島区から和光市に転入して2年が過ぎました。やっと慣れてきましたが、東京都と比べるといろいろ違う点があり、戸惑いました。まず保育園ですが、0歳児を受け入れてくれる市立の保育園がないのに驚きました。市に準ずる保育園が一つしかなく、しかもそこ

たことに気がついた。育児の中には、実は自分自身を知るという大切なことがあるように思う。毎日離乳食のメニューと睨めっこしながら、少しの時間自分自身

が一人の女性としてどう在りたいのか考えてみることは、家族の中の母親として在るためにも、大切なのではと思う。そうは言っても現実は厳しいので「私はこうしたい！」とは思ってみるが、ハイハイしまくる子供を前に挫折の日々

は0歳から2歳までしか見てもらえず、その後はまた別の保育園に入りなおさなくてはなりません。結局二人とも別々の保育園に通っています。しかも豊島区はお布団もシーツも無料で貸してもらえたのが、すべてこちらで用意しなくてはなりません。また、3歳以上はご飯かパンの主食を用意しなければならず、コップもお箸も持っていくのです。以前は完全給食ですべて園にありました。登園の準備も帰宅後の手間も増

です。働きながら育児をする友人、育児に専念する先輩など沢山の経験を参考にしながら「私の生活」を見つけていきたいと思っています。またいつか、仕事も始めてみたい、いつかそのころ自分は何歳なのか、目先だけでは想像できないことだらけの中で、家族と共に考えていければ理想です。

J・M (33歳)

えて、家族の食事の支度なども合せると休む暇もありません。和光市はどんどん新しいマンションが建って、小さい子供を持つ世帯も多くなっているようです。もっと子育てを応援してくれる制度が充実して欲しいと思います。

N・T (36歳)



高齢者を取り巻く地域の人の協力が不可欠

先日、友人と近所の高齢者宅に訪問する機会があった。老夫婦で、ご主人は脳梗塞で倒れ今は自宅でリハビリ中、老婦人は目もよく見えず歩くのが精一杯といった様子。訪問中ご夫婦は昔の周辺のこと、遠方に出られている子供、孫のこと等、休む間もないくらい本当に一生懸命話してくれた。会話中何

度も出てくる「私たちは寂しくない」という言葉に寂しい、寂しい、不安でどうしようもない。と心の中で叫んでいるように感じられた。極めつけは「私たちは子供に捨てられたのではなく、私たちが子供を捨てた」という言葉だった。

私たちは後頭部をハンマーで殴られたような、何ともいえない衝撃を受けた。私も、実家を離れ遠方に出ている身、田舎の両親もこの老夫婦のように子どもたちに心

家族同居でもヘルパー派遣を

ある日の夕食時、舅が食べ物を喉に詰まらせ大騒ぎした。その日から私の9年あまりの介護生活が始まりました。食道の手術は成功しましたが、まもなく体力の衰えから肺結核になり、入院を繰り返すという家族にとっては試練の日々でした。でも物は考えようで世話をしあげられる喜び、「ありがとう」といわれた時の喜びなど、それなりに楽しんでいました。

当時私が痛切に感じていたのは、何時間かでも留守をお願いできる制度がほしかったことです。父は在宅酸素を使用しており、長時間家をあげられないのに月2回、清瀬の病院に薬を取りに行かねばならず、役所へ相談にも行きました。が、当時は家族同居だとヘルパーを派遣してもらえませんでした。専門的教育を受けた方に時給いくらかと割り切ってお願ひできたらと切に思いました。

介護は24時間休みなく、先が見えるわけはありません。自分に

配かけまいと、必死に心の内をかくして生きているのかと思うと涙が出そうになる。現在、各都道府県では、高齢者等が利用できる設備が充実していても有難いことであるが、ほんの数分でもいいから一日一回顔を見て会話をし、少しでも不安を取り除いてあげられるよう、高齢者を取り巻く地域の人の力、手助けが必要ではないかと思う。

M・B (37歳)

余裕がないとつい辛くあたつてしまふものです。そんな時、何でもいから自分の時間を持つことが私にはとても大事なことでした。幸い家族の協力を得て趣味を続けてこれ、また悩みを話せる友人がおり、この試練を乗り切ることができました。今になってみれば、貴重な体験をさせてもらったと感謝しています。

Y・O (52歳)



介 護

皆さんからいただいた

「和光在宅介護支援センター」の24時間電話相談

高齢期に入っても住み慣れた地域で、住み慣れた自宅でずっと過ごしたい、そのような方とその家族を支えていくのが「和光在宅介護支援センター」です。電話による相談は、1年365日、24時間対応です。

例えば、短時間のホームヘルプサービスや、配食サービスについての問い合わせなど、様々な福祉情報と知識を持った専門家が、適切なサービスをご紹介します。相談は無料で相談内容の秘密も守られます。電話のほか窓口で、あるいは訪問による相談も受け付けています。詳しくは電話で(460-2940 シロウ・フクシヨ)どうぞ。